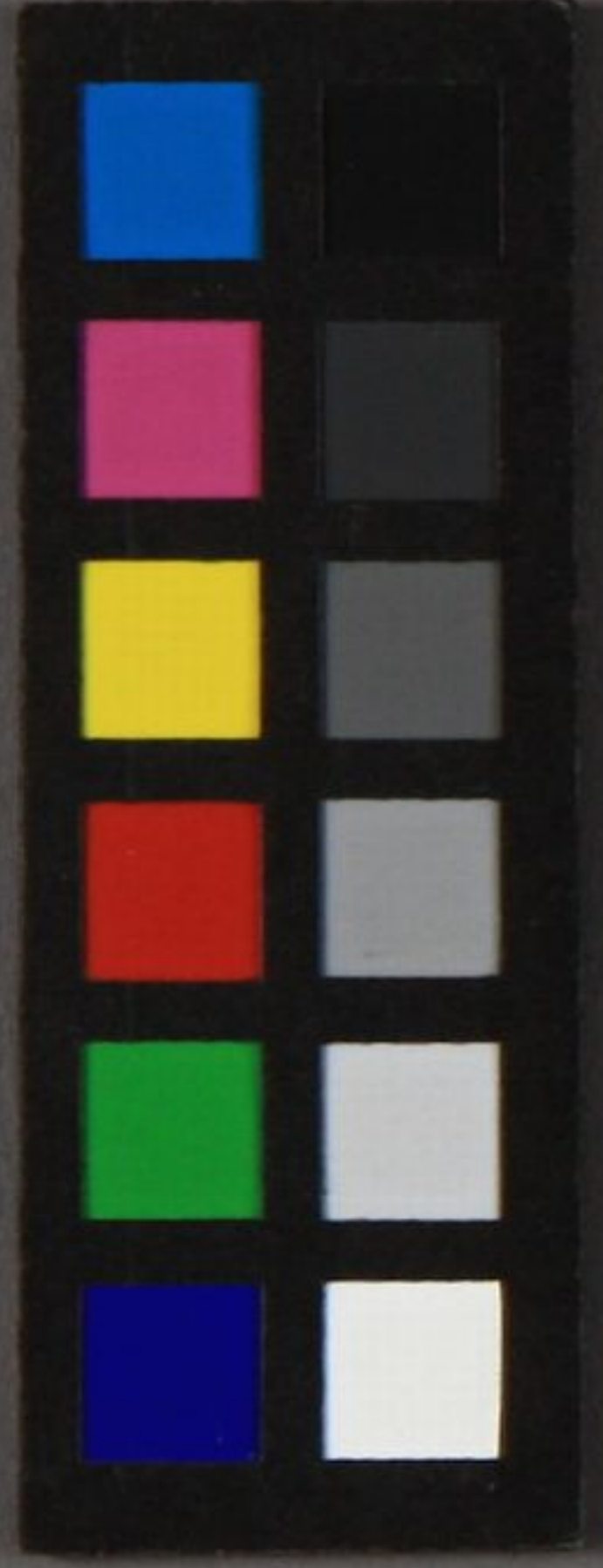


文藝學士國府寺新
 大和田健樹
 著譯
 書生唱歌
 岸田吉之輔纂輯

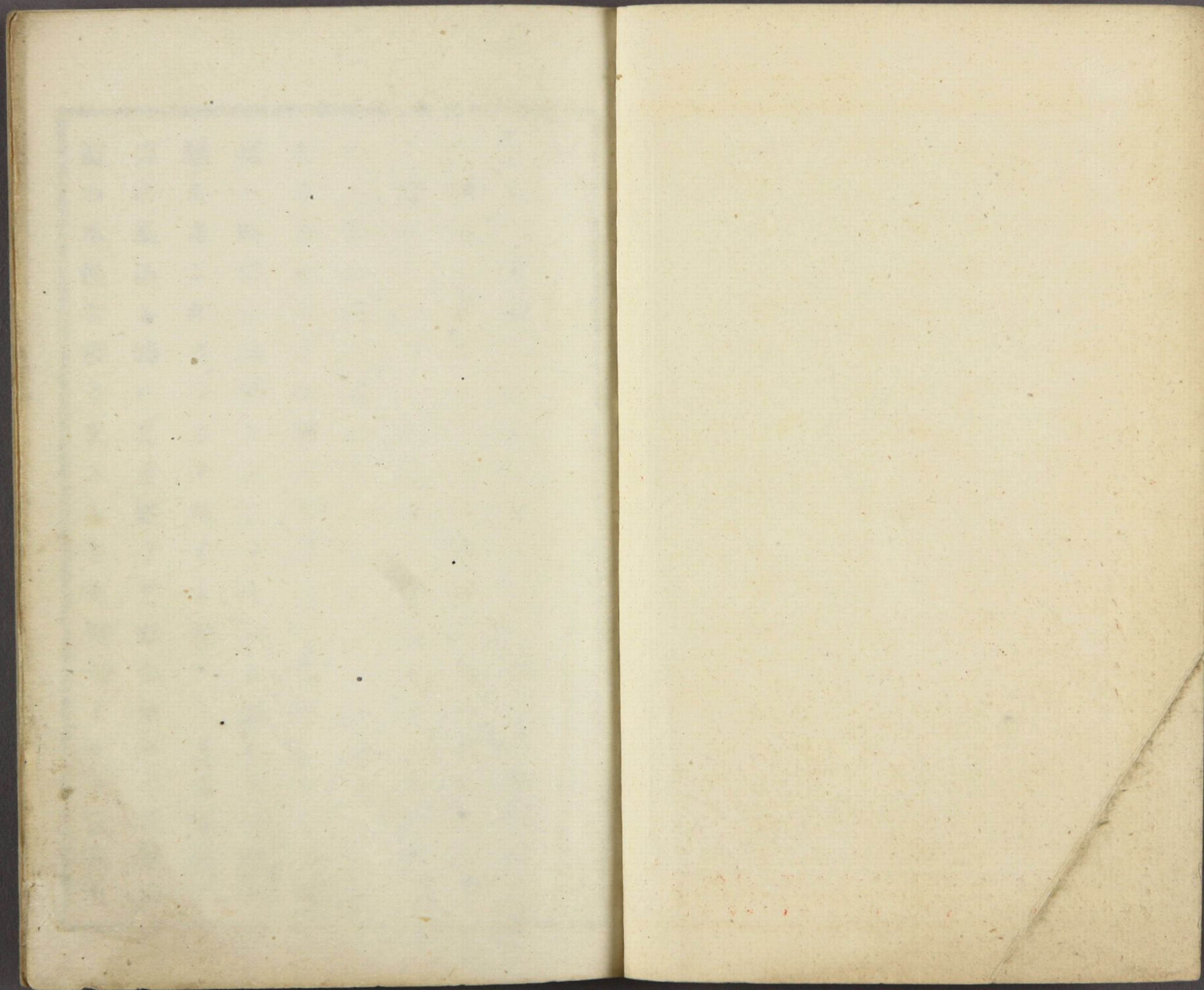


定價拾五錢





此書中之歌鄙俗拙粗不足讀尤
不足誦



序

唱歌は音調の妙を主とするの言ふも更なり、その辭句は勢ありて人の胸裏に徹し、感覺を誘起し、間接によつてその知識をひろめ、その意志をつよめ、人倫の道を進むる一助とからざるべからず、去りかから、その最も要用よて現今は急務なる處に、時俗は適切よしてその用は應じその弊を矯むるに在り、今も男子は女子よりき柔弱無氣力の風ある時に、之を謠うて知らず、勇進活潑の本性は復し、まゝ女子は男よりき生意氣出

過の風ある時、まゝ之を謠うていつのまゝも
 温順柔和の美德ようつらゝむるか如き効まゝ
 大なるべし、こゝは集めざる數章の未だ必ずし
 もこの目的は企て及ぶべしといふよのあらね
 ど、當時唱歌は從事する人のさめいさゝら老婆
 心を述べて序は代へ、以て自ら励むるのこゝ

明治十九年五月鷺城生梅花街の寓に識す

目録

○大和魂	〔鷺城生〕	一
○兵士の歌	〔全上〕	三
○劍舞の歌	〔國府寺新作〕	六
○ラインの守	〔全上〕	十
○バイロン氏青海原	〔大和田建樹〕	十五
○夕暮	〔全上〕	二十五
○少女四時の歌	〔全上〕	二十九
○勉勉の歌	〔櫻陰散人〕	三十三
○獨乙書生酒の歌	〔全上〕	三十七

書 生 唱 歌 大 和 魂

○ 大和魂

鷺城生稿

敷島しきしまの、やまどの國くにの大丈夫おとすけよ、

勇氣張ゆきさりゝてままりぞくを。

身みよたくはふる真心まごころは

天てんのあゝふる光ひかりあり。

その照てる道みちよむらひゆき、

誠まことをまもり義ぎをつくり、

れゞ質しつ樸ぼくを鎧よろいとし

真まことの名譽めいよを的まととせよ。

柔弱じょうじやく卑怯ひけつはけからはり、

やまどごゝろを備へとる
細行多言は恥のたね、

日本男子れどさあらず。

ものを言ふから心から、

事をするから身をすてゝ、

あとさきかまはず真直よ、

ますら武夫が戦場で

降りくる矢玉の中よとち

血ぬりし刃をうちふりて

敵おひ掃ふ如くせよ。

○兵士の歌

鷺城生稿

九段の丘のまんちろよ

そびえ立とるおほやしろ、

勇士の靈こそ宿るあれ。

王政維新のあらいくさ、

熊本田原の大てぎは、

きはどつ軍のはとらまひ

名義よかはりへあつとれど、

心よ二なきやまど武士。

敵よむらつてしりぞかず、

命をすて、義を取り、火花をちらし血をとほし、
 開化は進む日本國。忠臣義士のてからよて
 國を守りの神殿お
 づまる御靈を身よてらし、進めやす、めつはものら。
 今度、内地の事からず、兄弟同士討するであし。
 敵の異國の毛唐人、

このすきまをつけ込んで
 この権利を奪ひ取り、この名譽を侵しとる
 卑怯未練の外道あり。千萬勢がよせるとも、
 ひけずとゆまずうち向ひ、劍の霰玉のあめ
 厭はず敵をうち殺し、日本武士のてがら見せ、
 日本武士の名をあげよ。

○劍舞の歌 (一) 國府寺新作稿

立つて舞ふから劍を持つて舞へや。

劍は男兒の大事を道具。

馬を斬るふは及はねど、

人と切り合ふ折がある。

喧嘩をかふは大丈夫の

好んですべきふあらねども、

仕掛けられたる其時ふ、

不覺取るのは極卑怯。

顔み血ぬるはなんのその、

あつぽれ名譽を楯ふとり、
劍を引き抜き抜き勝負しろ。

○劍舞の歌 (二)

立つて躍るから劍を抜いて躍れ

劍は男兒の大事を道具

無くてはならない折がある

うちわ喧嘩はともかくも、

國と國とのあらそひに

兩軍間近く逼り合ひ、

硝烟彈雨のこりなく

其時そのとき用もちひ立つものは、
平生へいせいなれたる腰間こしあひだの
秋水あきづみならで何かある。

秋あき水みづならで何かある。

○劍舞の歌 (三)

劍けんをながめてつらくと
これは大事だいじな道具どうぐなり。
名譽めいよをまもる器きとなれば、

恥はぢのたねともまとならん。

されど道理道理のない時ときに
執とつて舞まふべし踊おどるべし。

一ひとたび鞘さやをはふれたる
拔ひてさわぐは馬鹿ばかの所作しよさ。

劍舞けんぶの一曲いっしやく舞まふたらば、
實じつををさめて御目ごめ出度いでう

事こと小實こじつのある時ときをまで。

書生唱歌 ラインの守

○ラインの守 (獨乙書生の歌) 國府寺新作譯

雷か波か太刀音か、

響くハハハラインまで。

獨乙の國のラインまで。

眞先うけて馳せむらひ

川を守るハ誰あるぞ。

守とあるは誰あるぞ。

あ、親愛の父母の國、

まづらよおはせ安堵して。

ラインの守は國のため、

二つ心をもつべきか。」

書生唱歌 ラインの守

この聲きくより勇くとつ

數萬の人民目をくはり、

大音あげて盟ふやう、

敬神愛國の獨乙人、

この親愛の國ざらひ

守らでどこよひうれうぞ。

あ、親愛の父母の國、

まづらよおはせ安堵して。

書生唱歌 ラインの守

ラインの守の國のさめ、

二つ心をもつべきか。」

まとも虚空をうち仰ぎ

先祖の御靈を拜つ、

勇みさけふ、やあライン、

ライン川こそどがこゝろ。

獨乙のものゝ外ならず、

人手よどとしてよろらうか。

あゝ親愛の父母の國、

いづらよおのせ安堵して。

ラインの守の國のさめ、

二つ心をもつべきか。」

いづくでもどが血しる、

身をはかれずよある内、

片腕でもどがからど、

武器とる力のある内、

敵一人もラインより

こなとよどとしてよろらう。

書生唱歌 ラインの守

書 生 唱 歌 ラ イ ン の 守

あ、親愛の父母の國、

ーづうよおんせ安堵して。

ラインの守の國のため、

二つ心をもつべきか。」

盟の聲の天よとち、

旗のあらーようち靡き、

同じ心よたかくと

呼はる聲をいさましき。

ラインの邊でラインよて、

書 生 唱 歌 バ イ ロ ン 氏 青 海 原

あ、親愛の父母の國、

守とならんもろともよ。

ラインの守の國のため

ーづうよおんせ安堵して。

○バイロン氏の青海原 大和田建樹譯

道なき森よとのーみあり。

さびーき濱よとのーとあり。

千尋の海とその波の

人かき方よも集會あり。 奏ある樂のーらべよて

自然をまゝて愛づるあり。 人を愛でぬよあらねども

自然の友よまじはりて、 身の來一方もゆく末も

言葉よいひいつくせねども
あまるこゝろを忍はれぬ。」

さうまけ深き青海原。

一萬艘のぐんらんも
とゞいとづらよううびゆく。

人のちうらの濱邊まで。 陸をは人の荒らせども

波の上なる難船も
ゝかこれ汝が刃ざぞうし。

人のちうらの亂暴は
身の不ろ残るあともなし。

雨のーづくのごとくよて
人よもしられず墓もかく。

泡どつ聲ともろともよ
汝が底よこそとづむあれ。」

海路の人の跡もなし。

人よどらるゝ地所もなし。

波躍らせて人を拂ひ

陸を荒らす人力も

汝の軽んじ視るならん。

大そらたうくさのむれよ

人をうちあげ飛ばせつゝ、

まさその波よおくるなり。

港めざしてこぎよする

はうなき願をのゝりて、

幸ある國まゆるせん

人をは陸にうちあげつゝ、

生死の人のまゝよして。」

むらふところ敵なく、

進むとちよおそれなく、

國主の肝も寒きまで

人の力ちからなりなから 岩いばの砦とりでもひゞうせて、

海の主宰しゅさいと自稱じしやうせる、 汝おが尊稱そんしやうを侵をかつ、

汝おより見みあはさむれよて さとも巨大こゝだいの軍艦ぐんかんも、

風かぜの雪吹ゆきふよ似にとるべし。 風かぜの雪吹ゆきふよ似にとるべし。

トラフルガルの分取ぶんとりも スペイン國こくの艦隊かんたいも 汝おが底そこふうくきえうせぬ。」

濱邊はまべよとてる帝國ていこくは

汝おをのこゝて變かりゆく。

ローマ、ギリシヤ、アツシリヤ、 いまのいうある世よのさまぞ。

自由じゆよ富とみくと往昔むかしも、 無道むどうの君きみのいでと日ひも、

岸きしの奴隸むせとなりとるよ 汝おのひとり染そくもせず。

あとの荒野あれとある世よも

青き額ハ年月の

面影ウハる事もなく、

皺さへよせず老いもせず、
神代のまゝにながるなり。」

造化の神の御姿を

嵐にうつすたとつゝの

高大無邊のます鏡。

あぎとるゆふべはるゝ朝、

風のふく晝ふらぬ夜半、

南北極を氷らせて

境もくえずともなし。

變らぬ御影、神の御坐。

千尋の底の塵うらも

魍魎魍魎ハいでくべく、

諸帯もなびきとさかへり。

靈妙不思議かぎりなく

汝のゝひとりすゝゝゆく。」

かはゆくゑとさり、汝海よ。

汝があわお似て汝が胸ななをさああそびの樂たのみは

そとる事ことふてありとよな。われもうかびつうかさされて、

汝が波なみとこそあそびとれ。わが身みをさなき昔むかしより

潮瀬しほの海うみのさわぐとも。波なみぞわが身をさぐさめし。

われは汝が子のこゝちとて、そのおそれこそ樂たのとけれ。

遠山寺とほやまのうねの聲こゑ ○夕暮ゆふぐれ

林はやしをこむる夕ゆふはむり ひゞく方かたよりくれそめて、

日影ひかげのこさずありまはり。

ねぐらふらへるむらがらす

うら聲すこくふくろふの

あくやういろの岡つゞき。」

たなびきのこる雲間より

おちくる星のうすあかり、

天つ少女が降らしとる

花うとくえてなつうとや。」

海を家ある舟人の

この影をのくとるべよて、

波路よりちやすむらん。

なれとくたとおむらふらん。」

やどりをくれと旅びとへ

このうすあかりをとよりよて、

しらぬ山ちやたどるらん。

末野の里やたづぬらん。」

ふせやの火影^{ほかげ}のこえて

くるや老嫗^{らうご}の糸車^{いとぐるま}、

心ぼそげのなりひも

あわれ身まゝむゆふべかき。」

かゝるさびしき夕ぐれ^{ゆぐれ}の

空ゆく雁^{かり}をかそへつゝ、

千里の外^{ちとせの外}よこかれ來^こじ

おやおもふ身やいかをらん。」

春^{はる}はずどれよちるさくら。

夏^{なつ}のきをよとぶ螢^{ぼた}。

秋^{あき}の月^{つき}かげ冬^{ふゆ}の雨^{あめ}

いづれもおもひのとねあるを。」

少女^{をとめ}四時^{しじ}の歌^{うた} 大田建樹^{おおたけんじゆ}作

春

いでよ人^{ひと}くゑるのゝみ。

れんげは花^{はな}もさかりあり。

なとねの花^{はな}もさかきあり。

うとふ鶯舞ふ胡蝶

三十

うかれあらずをぬ物もなし。

つめくすみれ少女子ら。ぬけくつをな童男子ら。

つめくすみれ少女子ら。

あらおもいろの春の野や。のあそびや。

夏

すゞみふいでよ川原まで

風心地よいかよふなり。

月おもいろくてらすあり。

琴をひくや岡に松。

鼓みをうつや川のくづ。

あつさゝ波ふながれはり。

ちれく夜露とが袖ふ。

月をうつしてあそはま。

うさうま。

秋

ゆはやとち秋の野は

いまこそさか花ざり。

きくゆうかるかや女郎花、

三十一

萩もすゝきもとよくと
人まちがふよなびくなり。
ふみなあらそ、草かりて。
ふきれみどそ夕嵐。

あすもきて見んこのよべを。
このよなを。

冬
ふれく小雪、ふれ小ゆき。
むかふの松もかくる迄。
かきねの竹もとむまで。

ひろへや子ども玉ひろへ。
かぎれのや子ども花かぎせ。
あらおもいろの雪げいき、
ぎんの世界になりよはり。

なふれ小雪よるまでも。
あすまでも。

東京十五區八百町、
勉強の歌

櫻陰散人稿

公立私立諸學校、

書生のうすはいくをくぞ。

書物の虫とあらぬやう

無益を議論はやめにして

他日の用にあたらんと

實行一筋才をとき、

苦學勞動いとひあく、

あとへひうじと學ぶべし。

一朝國小事ありて。

砲火のちのち天をやき

喇叭の聲の地ひひゞき

修羅のちまたとある時は

學者めうしき顔せず

筆も硯もあげすて、

肩に鉄炮、腰に劍、

近衛鎮臺もろともよ、

進めの聲をきくや否、

一歩もひらすまじろらず、

國家の大事を先にして、

こが身の苦樂の後にして、

日本男子の肝をくせ、

おくれをとらね心かけ

常小脳裡わとくへて

本よむ間おも身を修め、

修身第一智慧第二

國家の大事わあたるべく

民のとのく小應すべく

あつはれ勉強よじや
ないか。

○獨乙書生酒の歌 (壹) 櫻陰散人譯

醫者どのある時尋ね來て

小首うとむけいふ事よや。

酒のすつはりやめよーろ

ビール葡萄酒ブランドー

いまうらさらやとやめ給へ、

さあくの死神とりつくぞ。

へい／＼それのおそろむや、自由

酒を断ちますと

盟をさて、三四日

飯めうまうらず睡ひかられず

とつろと、ぬおほ大びやう病き氣、

万事ばんじ不ふ自じ由ゆう氣きはふさぐ、

ろこで盟あかいをうちやつて

大おほさうづきをとりいどー

重かさねくくののみみせせは

病びやう氣きはそこへう逃にげ失しせて

あどあののここつつとととれれひひどどり、

たべものうまくよく寝ねられ

勇ゆう氣き凜りんくく胸むねひひららけ

また二に三さん盃ばいとりあげて

大おほ聲こゑああげげてて叫さけぶぶよよは

死し神かみきたれいいぎぎきたれ。

わわかか精せい神しんははももうう晴はれれと。

ももそそやや死いんんででもも恨うらみををと。

取とりりつつくく事ことがが出で來きるるああらら

やれ來きてれれいららかか酌しやくををーーろ。

○獨乙書生酒の歌 (二)

徳とく利り小こ酒さけののああるる時ときは

ついでのものが大愉快。すてきの愉快は何じやろぞ。

ついでのものが大愉快。こりや〜諸君よのまをいか。

財布お金の時は。ついでのものが大愉快。

さうづきもつのが大愉快。すてきの愉快は何じやろぞ。

拂が出来をいその時は。こりや〜諸君よひけどるを。

借りておくのが大愉快。

敵お出合ふとその時は。すてきの愉快は何じやろぞ。

相手でのむのが大愉快。こりや〜諸君よとつかりと

のんで〜のみ倒せ。敵を倒すは大愉快。

酒が盡きとるその時は。すてきの愉快は何じやろぞ。

氣長あがうするが大愉快たいげつがい。

こりやく諸君しよくんよもうすこし。

徳利とくりがからふをつとて

も一つ取つとらえじやいか。」

獨乙書生酒の歌 (三)

同おな一いつ升しよの酒さけの中なか、

甘露かんろもあれは毒どくもあり。

同おなじ一ひとつの猪口ちやくららも

美人びじんも出れは鬼おにもでる。

ちがふの飲人のんじんの品しやうよよる。

馬鹿ばかを野郎やろうがのむ時は

毒どくよ當りて發狂はつきやう一

鬼おにの餌食えじきとなるはうり。

これらうちよりのむ時は

甘露かんろのんをうるゝて

才力さいりき發はつ一いつ智恵ちゑひらけ

眞まことよ美人びじんの友ともとなる。

酒さけはからだふふる雨あめう、

惡あく一いつき土地とちは泥どろをまし、

善き畑には肥となる。

明治十九年七月二日板權免許
同十九年七月 日出板

編纂人

岸田吉之輔

東京府平民

出版人

酒井清造

東京府平民

發兌人

東生鉄五郎

東東府平民

同

吉田正太郎

埼玉縣平民

神田區小川町九番地

